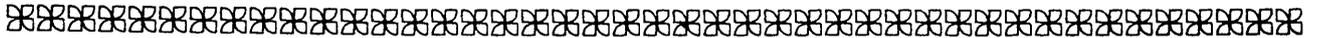


臥龍が丘は緑なり

松高同窓会東京支部会報
平成8年(1996)新春号





新年独言



東京支部長 佐伯 益一

平成七年もあと僅かで終るが、新しい年を迎えるに当たり 新年おめでとうと言う気にもなれない。猪年は荒れると聞いてはいたがこんなに荒れた不快な年は近年滅多にないと思う。私が古希を超えたからといっても、これはシャレにもならない。

災害の発生は仕方ないとしても 凶悪犯罪の発生、汚職の頻発、銀行信金等の背信行為、その他諸々。政治も又、貧困を極めているし、外交に至っては正に屈辱そのもの、日本悪者論が横行する中で近隣諸国の謝罪、補償要求に始まり、理解し難い人道上の援助とか頭にくることばかり、日本人は精神的、経済的侵略に犯されているのではないかとさえ思う。ともあれ現世に警鐘を鳴らしリーダーシップのある政治家が同窓から一日も早く出て来ぬかと思う昨今である。

冒頭、筆が滑りすぎたようだが 軌道に戻す。

今年（七年）は親戚も含めて親しい友人、級友を四人も失った。特に長年、支部事務局長を努めていただいた中村先輩が急逝されたことは大きなショックであり、支部長として正に両腕をもがれた思いである。退院されたら喜寿のお祝いをしようかと役員間で話し合っていた折でもあり、今は空しい。長い間ご苦労さまでしたと申し上げる他なく、只ご冥福を祈るのみである。中野君とて同様である。

東京支部では9月9日に幹事会を開催、事務局後任人事を決定し、又 中村氏ご家族の了承を得て、事務局を文京区本郷に移設することが出来た。新事務局長、次長はこの道のベテランである。今まで以上のご支援をお願いしたいと思っている。

さて、最後になったが、私は役目がら色々な会合に呼ばれるが、出席してみると女性専門の会は別として参加する女性の数が極めて少ないようである。これに反して私共の同窓会は、大会にしろ役員会にしろ女性の出席がすこぶる高率、良好であることであり、活発な発言も多い。これは和やかな雰囲気の中で、しかも真剣に会が進行されているからと考える。同時に職場や家庭のご主人さま（旦那さまが正しいか？）の参加に対する深いご理解があるものと改めて感謝申し上げたい。支部長が礼を言っていたと、よろしく申し上げていただきたい。

勝手なひとり言を述べたが暦返りの新しい年を迎えるに当たり、会員、関係諸兄、諸姉の益々のご多幸、ご健在であれと心から祈り、本年もよろしくとお願いする次第である。

【表紙写真について】

村松藩、三万石の始祖、堀 直時公の父

堀 直奇公の銅像

蔵王堂城址（現長岡市蔵王町）に建つ、高さ三、二米、台座二米の立像で平成七年四月二十三日、除幕式が行われた。作者は「米百俵」の制作者で日展の元井 達夫氏。おそらくは県下一の大きさだろうと言われている。

直奇公は蔵王堂城主として長岡城（後の牧野氏）建設や城下町整備、新潟築港（当時長岡藩領）などに功績のあった人で、あと村上藩十三万石藩主に転封後、遺言により次男直時に三万石を与え分家させたのが村松藩（当時村上藩領）の始まりである。以来、村松藩は明治新政府による廃藩置県の大改革が行われるまで、堀家十二代、二百二十余年続くことになる。

詳しくは本誌16号に関連記事が掲載されているので参照されたい。今のJR長岡駅は長岡城の跡地である。

（1995.10. 2 撮影 佐伯）



第38回東京支部大会

歌あり、踊りありで 大盛会 !! —浅草ROX会館で—

第38回 M. D. T. 大会は6月3日午後3時より、浅草ROX会館ニューオータニで会員、関係者130名が出席盛大に開催されました。東京支部では、この集いを総会と言わず大会と呼んでおります。同窓生のお祭りと言う意味です。さしたる議案もなく昨年度の経過報告、決算報告を承認、佐伯支部長、茂野同窓会長、新任の吉川校長の挨拶、学校の近況報告、祝辞などのあとはお祭り一色、唱歌「ふるさと」を全員で合唱、ジャンケンゲームでは優勝者3人に「佐伯賞」が贈られ、伊藤勇五さんの「川」に聞き惚れ、北区区人会おけさ会の佐渡おけさ、相川音頭等の踊りを堪能、十日町小唄を歌い、炭坑節では一緒に輪になって踊るなど、会場の熱気は盛り上がる一方でした。また抽選会では出席者持ち寄りの「越の寒梅」を始め60数点の賞品がそれぞれの手に渡り、又また「高校三年生」「青い山脈」「校歌」「応援歌」の大合唱。最後は来年の元気な再会を約して支部長による三本締め、校長先生の万歳三唱で午後6時すぎ大団円の幕を閉じることができました。

この度は今までの立食と違い全員椅子席であったためわりとゆとりのあった大会でした。



次いで7月1日午後2時より同ニューオータニで大会反省会を兼ねた幹事会を開きました。その結果について主なものを要約して記してみました。(出席13名)

- (1) 大会がスケジュール通りに進み、定刻に終わることが出来たのは幹事、司会者の努力である。
- (2) 長時間立っているのは疲れるとの配慮から全員着席にしたことは喜ばれた。自分の席が確保されているとの安心感があるようだ。但し円卓では主賓及び一部の人が正面に背を向けることになり、これは不都合、再考研究の余地がある。
席順・配席には苦勞した。
- (3) 出席者の倍増をねらい、幹事の努力にもかかわらず出席者の数は例年なみ、増員は一朝一夕にして成らず、同窓会は同期会の積み重ねによって成り立つとの観点から同期会にむけて不断の接触努力が大切、人を集めるということは困難な仕事である。
- (4) ホテル側の対応は誠に良く、好感をもてた。引き続いて利用したい。(次期も予約済み)
- (5) 出席の回答の有った人で当日無連絡欠席が多かったのは遺憾、経費に影響を来す。遅刻して来るだろうと待っている受付係も大変。いかが対応すべきか意見続出したが結論出ず。少なくとも3日前までに連絡がほしい。各自の良識にまつのみ。
- (6) 新規出席会員に対する配慮が大切である。
特に一人で出席した場合、役員がフォローすべきである。
以上



第38回 東京支部大会出席者 (敬称略) 総数130名

平成7年6月3日 (土) 浅草ROXニューオータニ

◎旧中の部 (18名)

佐久間精一 伊藤 達郎
 芳原 英男 松田長四郎
 西山 莊平 吉田 公男
 五十嵐一郎 佐藤 豊夫
 加藤三代太 高久 貞夫

中村 倉吉 堀 哲二
 宮 健三 武藤 三郎
 佐伯 益一 相田幸四郎
 伊藤 勇五 斎藤 和男

小島 典子 飯利 幸
 許斐 紀子 土井 トシ
 渡辺 厚子 徳永 道子
 阿部 雄子 小林 満子

田中 富子 市川 俊
 中島 和子 近藤 燦子
 松尾 恵子 田淵みやの

◎旧女学校 (5名)

岡本 和子 鈴木 節子
 一氏 愛子

佐藤 玲子 小林 早月

◎来賓の部 (12名)

同窓会長 茂野 敏郎 (旧中17回)
 高等学校長 吉川 益男
 同窓会担当教諭 江口 昇 (高3回)
 元同窓会担当教諭 関谷 正中 (高6回)
 同窓会事務局 伊藤 ヒサ
 新潟県人会事務局、兼
 安塚高校同窓会東京支部
 津川高校同窓会東京支部
 北区新潟県人会おけさ会 竹内 富男
 波田野亮一
 佐藤ミツエ (他5名)

◎高校男子の部 (60名)

篠川 恒夫 青木 猛
 桜井 貫 孝世
 松田 博 伊藤 勤吾
 加藤 清治 大島惣四郎
 木村 時也 坂上 卓夫
 佐久間英輔 五十嵐 健
 大橋 俊夫 築取 錦二
 塚田 勝 佐藤 匡秀
 松尾 正春 関 和世
 阿部 敏 沢出 晃夫
 大橋 貞夫 新保 優
 近藤 尚志 宮沢 正由
 田代 信雄 安部 実
 武藤 正昭 三浦 靖典
 笠原 静夫 三室 茂和

杵淵 政海 築取 正通
 渡辺 八郎 土田 猛
 鈴木多喜男 鈴木 健司
 下野 文幹 弦巻 等
 杉山 喬 沢出 赳允
 畔田 昭義 浅井 昭男
 長賀 一哉 神田 弘毅
 山崎 輝雄 鈴木 輝雄
 吉井 清 石黒 四郎
 斎藤 収二 鶴巻 浩
 高岡 雄三 鶴巻 静夫
 中川 四郎 佐野 俊夫
 今井 英雄 笠原 久
 小笠原一憲 青木 敏和
 宮崎 信次 中嶋 久巳

(1) 抽選景品 男子23名、女子14名 (66品)

武藤 三郎 宮 健三 吉田 公男 佐伯 益一
 伊藤 勇五 斎藤 和男 加藤三代太 篠川 恒夫
 青木 猛 関 孝世 渡辺 八郎 鈴木 健司
 杉山 喬 沢出 赳允 佐久間英輔 塚田 勝
 関 和世 石黒 四郎 高岡 雄三 大橋 貞夫
 鶴巻 浩 中川 四郎 田代 信雄
 鈴木 節子 佐藤 玲子 小林 早月 岡本 和子
 深見 洋子 木村 孝子 山西愈佐子 真水 道子
 小島 典子 徳永 道子 中島 和子 近藤 燦子
 渡辺 厚子 小沢 幸子

(2) 津川高校同窓会東京支部、波田野亮一氏より「越の寒梅」一升

(3) ジャンケンゲーム勝利者へ「佐伯賞」として、佐伯支部長より3名の方に

◎高校女子の部 (34名)

佐藤 八重 大嶋 エミ
 佐々木恵美 向山 律子
 木村 孝子 山西愈佐子
 波多ミサエ 治田レイ子
 高瀬 笑子 正木美美子

豊田 君枝 佐野美枝子
 高浜つる子 深見 洋子
 片柳 ムツ 岡部 ユキ
 久我 マキ 大竹 和子
 宮腰 ヨイ 真水 道子

第38回 東京支部大会収支決算書

平成7年6月3日 (於、浅草ROXニューオータニ)

収入の部		単位=円	支出の部		単位=円
大会会費		1,092,000	通信費		65,690
男子78名 @10,000	780,000		印刷費		7,083
女子39名 @8,000	312,000		大会費		1,170,676
祝儀 (敬称略)		85,000	会場費	995,793	
同窓会本部	40,000		持込酒代	51,147	
東京新潟県人会	10,000		記念品代	61,800	
波田野亮一	10,000		来賓土産代	14,420	
関谷 正中	10,000		謝礼 (2件)	40,000	
岡部 ユキ	10,000		雑費	7,516	
堀 哲二	5,000				
小計		1,177,000	小計		1,243,449
支部一般会計より支出		66,449			
合計		1,243,449	合計		1,243,449



ありがとうございました

①平成7年度会費納入の皆さん

◎旧中の部（54名）

相田和平、相田英三郎、相田忠亮、伊藤勇五、伊藤秀男、相田英三郎、伊藤達郎、板垣文平、市川薫平、岡村嘉志、五十嵐一郎、落合常雄、加藤 豊、亀嶋 謙、熊倉 悟、加藤三代太、片桐賢太郎、笠原健二郎、斎藤誠七郎、小島哲衛、小柳 実、佐久間精一、斎藤和男、斎藤朝之、佐伯益一、佐藤豊夫、式場俊三、関谷捨蔵、関山健芳、高久貞夫、団 順一、千代国一、寺田徳和、寺田徳隣、中村倉吉、西山莊平、二平 晶、芳賀健一、福原平八郎、藤原良造、堀 哲二、松田長四郎、丸山一夫、水尾広吉、宮 健三、武藤三郎、山口三郎、矢部五郎、芳原英男、吉田正平、吉田公男、横松宏平、渡辺文男、渡辺方夫、

◎高校男子の部（110名）

青木 猛、青木敏和、新井康夫、浅井昭男、阿部 敏、阿部 実、五十嵐 健、石黒四郎、伊藤 馥、今井勤吾、今井英雄、梅田久次、大島惣四郎、大西範孝、大橋秀雄、大橋俊夫、大橋貞夫、小笠原一憲、笠原 久、笠原静夫、笠原大四郎、亀山知明、川合敏男、金子鶴男、加藤清治、川村完爾、神田弘毅、岸谷 武、杵渕政海、木村時也、剣持常泰、小日山芳栄、小池生夫、小林末吉、近藤尚志、近藤英洋、近藤洋輝、近藤毅夫、篠川恒夫、佐々木秀三、佐々木秀和、笹崎勇三、佐藤匡秀、坂上卓夫、斎藤收二、佐久間英輔、沢出起允、沢出晃夫、桜井 貫、佐野俊夫、下野文幹、新保 優、鈴木忠雄、鈴木健司、鈴木輝雄、鈴木多喜男、杉山 喬、関 孝世、関 和世、関谷雄二、瀬倉武志、高岡雄三、高地一郎、高地 彰、高橋研治、高山幹雄、滝沢信喜、田代信雄、長賀一哉、塚田 勝、土田 猛、鶴巻 浩、鶴巻静夫、鶴巻疏三、弦巻 等、弦巻一郎、坪谷次郎、寺山和夫、長沢友次郎、中山 健、中嶋久己、中川四郎、二宮文三、畔田昭義、長谷川五郎、広田達衛、堀 直昭、堀川俊郎、松尾 貢、松尾 了、松尾政春、松尾保司、松田茂夫、松田輝夫、松田 博、丸山貞次、宮沢正由、宮崎信次、三浦靖典、三室茂和、村川五郎、武藤正昭、目黒義二、八木又一郎、梁取正通、梁取錦二、山崎輝雄、米山正嗣、吉井 清、酒井俊昭、

◎旧高女の部（18名）

石井洋子、一氏愛子、内田道子、大橋玉枝、岡本和子、熊倉芳枝、小林早月、近藤昌子、佐藤玲子、新保清子、鈴木節子、田村ミツエ、中野松葉、藤崎トヨ、堀 和子、丸山セイ子、村田瑠都子、渡辺ミツ、

◎高校女子の部（59名）

阿部雄子、荒井るり子、飯利 幸、市川 俊、大島エミ、井関あき子、大橋マツエ、緒方美恵子、緒方康子、岡部ユキ、大竹和子、片柳ムツ、木村園子、波田ミサエ、熊倉悦子、久我マキ、許斐紀子、小島典子、山下由紀子、近藤燦子、斎藤英子、雑賀和子、坂爪圭子、佐久間順子、斉木明子、佐野美枝子、佐藤和子、佐藤八重、島田淑子、佐々木恵美、鈴木則子、田中富子、高瀬笑子、高橋泰子、高浜つる子、出口テル、寺山征子、徳永道子、土井トシ、田淵みやの、中島和子、原田良子、小林満子、高橋睦子、治田レイ子、深見洋子、真水道子、松本知子、松尾恵子、正木芙美子、向山律子、宮腰ヨイ、宮川陽子、森 睦子、山西愈佐子、木村孝子、横溝田鶴、吉井祐江、渡辺厚子、
以上合計 241名（9月30日現在）

◎平成7年度寄付金納入の皆さん

◎男子の部（49名） 計 195,000円

20,000円 亀嶋 謙
10,000円 堀 哲二、伊藤淳一、関谷正中、長沢友次郎、五十嵐喜作、
7,000円 式場俊三、山崎輝雄、大橋俊夫、笠原静夫、佐伯益一、笠原 久、
6,000円 沢出晃夫、
5,000円 阿部善磨、
3,000円 鈴木忠雄、渡辺方夫、吉田忠至、
2,000円 堀川俊郎、高久貞夫、小日山芳栄、熊倉 悟、加藤 豊、西山莊平、芳原英男、亀山知明、大橋貞夫、関谷捨蔵、武藤三郎、塚田 勝、梅田久次、武藤正昭、佐々木秀三、佐藤豊夫、高地 彰、横松宏平、川合敏男、吉田公男、金子鶴男、伊藤秀男、沢出起允、剣持常泰、下野文幹、関山健芳、斎藤和男、田代信雄、鶴巻静夫、吉井 清、小柳 実、
1,000円 宮 健三、

◎女子の部（21名） 計54,000円

7,000円 岡本和子、
5,000円 山西愈佐子、
4,000円 木村孝子、
3,000円 岡部ユキ、大橋玉枝、松本知子、
2,000円 熊倉芳枝、横溝田鶴、新保清子、真水道子、雑賀和子、向山律子、佐藤八重、小島典子、鈴木節子、佐藤玲子、小林早月、一氏愛子、深見洋子、片柳ムツ、
1,000円 高瀬笑子、



お便りの中から

◎ (前略) 先日は東京支部大会にお招きいただき、誠にありがとうございました。錚々たる方々が多数集まり、誠に盛大でありました。支部長の佐伯様のご人徳、ご苦勞の程が拝察されました。本当に楽しい会でありました。厚く御礼申し上げます。

その上、二次会まで参加させて頂き恐縮の限りでありました。小生折悪しく姪の結婚式のため早々に失礼させて頂きましたが、時間があれば皆様の美声をお聞かせ頂けたのですが、これは次回の楽しみと致します。

本校も少しずつ良い方向に進んでおりますが、今後とも同窓の皆様のご支援を賜り、さらに発展したいものと考えております。昨今の少子化の風潮の中、学級減などの話もあり、心を痛めております。職員一同打ち揃って村松の伝統を守るべく努力してまいりたいと存じます。

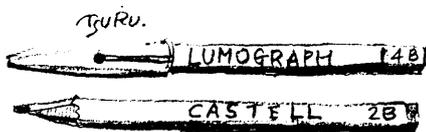
末筆になりましたが、お世話になりました支部の役員の皆様に宜しくお伝えくださるようお願い申し上げます。

(松高校長 吉川 益男)

◎ 過日は昨年引き続きお招きを頂き有難う御座いました。年々の盛会、会長さん始め幹事の皆様、御苦勞様です。多くの先輩、同期の皆さんにお会いし、懐かしくまた会員の皆さんの日頃の御活躍に敬意を表します。私は反対に叱咤激励を受けた次第です。余興の佐渡おけさ、相川音頭とともに力強い母校の応援歌の数々は何時聞いてもいいものです。久しぶりに若返ったものでした。如何に多様の時代にあっても、かつて応援歌を懸命に唄わされた、唄った頃の気質が、今の校風のなかにも良い意味で活かされればとも思いました。なにしろ根っからの田舎者なので、東京地下鉄と聞くと今年は特にサリンなんてものがよぎりましたが、アンドリュウワイエスの美術展を観る機会に恵まれました。

大変お世話になりました。感謝申し上げます。益々の東京支部のご発展を祈念申し上げます。

(松高教諭 同窓会担当 高3回卒 江口 昇)



◎ 過日は盛大なる東京支部大会にお招きいただき、そして大歓待をいただきまして本当にありがとうございました。今年はどうな方々が出席なさるのかと胸をときめかして参りました。私の予想どおり、お懐かしい方々が大勢出席なさり、お目にかかれて大変嬉しゅうございました。昔の紅顔の美少年、美少女の頃を思い浮べておりました。そんな皆様方とお逢い出来、本当に感激してしまいました。支部長様始め役員の方々のご苦勞がどんなだったかと心を痛めております。やがて本部の総会も間近かですがとてもとても逆立ちしても東京支部さんのようにはまいりません。でも少しでもその方向に近づけるよう私達も頑張りたいものと願っております。どうぞその節はくれぐれもよろしくお願い申し上げます。

末筆ではございますが役員の皆様によりしくお伝え下さい。東京支部の益々のご発展と皆様のご健康を心から祈念いたします。 かしこ

(松高同窓会 本部事務局 伊藤 ヒサ)

◎ (前略)

六月三日の支部大会は会場も新たに盛会裡に終了されましたことをお祝い申し上げます。プログラムを拝見させて頂きましたが一層の趣向が凝らされておられ、会場の様子が彷彿させられました。往時を大変懐かしく思い出しておりますが、会長様はじめ役員諸兄姉にいちいち御挨拶もうしあげられませんでしたことを申し訳なく存じております。皆様の益々のご健勝とご発展、会の一層のご発展を祈念申し上げます。

(前松高校長、新潟西高校長 徳橋 時男)

◎ 東京支部の皆さま一人ひとりとお会いしている気持で「臥龍が丘は緑なり」を読ませていただきました。

なつかしい記事もありましたが、写真入の役員紹介が良かったと思っております。柏崎高校の総会は八月第一週の土曜日となっており、県知事も同窓ということで昨年は講演をしてもらうなど、毎年盛大に開催されております。支部では、関西柏会、東京柏会、新潟柏会などがあり、この三支部には校長が出席しておりますが、今年同窓の皆様にご甘えて夫婦で出席する事にしています。関西柏会は四月二十三日でしたので家内と春の京都を満喫してまいりました。七月七日が東京柏会の総会ですが東京の星空でも眺めてみたいと思っております。

お陰様で柏崎高校におきましても、松高同様に同窓の方々や地域の皆さまのご支援を得て学校は順風を受けて



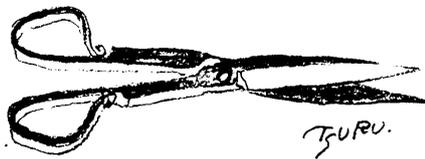
進んでおります。校長は自己の全人格をかけて学校の発展のために尽くすという使命がありますので、今後ともいろいろな方々との出会いを大切にしながら日々努力したいと考えています。おわりに松高ならびに松高同窓会東京支部のますますのご発展を祈念いたしましてペンを置きます。

(元松高校長、柏崎高校長 佐藤 義雄)

◎ 「臥龍が丘は緑なり」誠に村松町に相応しいイメージだと存じます。この度も東京支部会報を恵贈賜り大変有り難く、佐伯先生には常にお世話になっております。

私は沼垂高校を最後に現在体操競技を子供たちに教えております。村松出身の加藤澤男氏は世界を股にかけ、体操に懸命のことと思います。佐伯先生の益々のご発展をお祈りいたします。

(元松高校長 渡邊 建夫)



◎ 貴支部会報が届きました。益々貴支部が活動されているのを拝見し頼もしい限りです。こちらは故郷に近いせいか、なかなか盛り上がりず弱っています。それでも母校のためという大勢参加されるのでまた捨てたものではないと思っています。母校もようやく教育に活力が出てきたようです。スポーツでも新聞に顔が出るようになっていきます。速く元のように立直ることを祈っています。

(松高同窓会新潟支部長 佐野 宏)

◎ 支部会報を有り難く拝読、何時ものことながら支部長さまの覇気がひしひしと感じられ、大会の歓声と歌声が耳を打つ思いが致します。「大空に散った同窓たち」を読んで戦後五十年を想い感慨無量です。

(中26回卒 中村 市雅一郎 在黒崎町)

◎ 会報恵送深謝、全文拝読、いつものながらの佐伯大兄の格調高い玉稿、さわやかな気持ちにさせていただき、三つのモットーをかみしめています。予科練で死をとげた学友たちのこと、村松連隊の歴史など近況と歴史双方の視点が会誌を魅力あるものにして、と愚考致しております。

(在津田町 田崎 三一)

◎ 会報送付まことに有難う。内容は本当に素晴らしい印象の深いものばかりですが、級友中野君の訃報にはさすがにショックを受けました。驚愕として涙を思い起こし深く哀悼の意を表しご冥福をお祈りします。また皆川三郎君の大空に散華した記事など、仮には、学校からの同級生なので又、特に私達異様な青春時代と学校生活が思い出され言葉もありません。また村松連隊の足跡などの記事等、村松に住む人も詳しく知るものを、兵舎の営門と衛兵司令所の写真など珍しいものを集録には本当に感銘を受けます。編集者の努力に敬礼します。

(中27回卒 渡辺 好雄 在村松町)

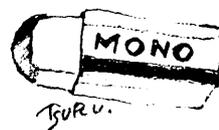
◎ 益々お元気で大活躍、どこにその「Tsuru」があるのか不思議に思う位です。支部会報の頒配ありがとうございます。感謝いたします。そのスケジュールを見て、一とさびつくりもし、感心もしております。生きて敬愛、鉄人かと思われた中野君が逝かれ、ご冥福を祈り哀悼の意を表します。会報で武藤三郎氏の元気で熱心に活躍の様子伝わってきます。

(中27回卒 鈴木 純也 在村松町)

◎ 会報の中で中野 博氏の死去を知りまして、吉田公男君の見舞った様子や、貴兄(佐伯)や西三氏の見舞われた様子が目に見えるようです。自分もその年を過ごしたと思います。また級友の皆川三郎氏の訃報も載っていますが、ご冥福を祈る気持ちで一杯です。自分は自身の濃い同窓のつながりの暖かさがにじみ出てきます。

ありがとうございました。

(中27回卒 印井 信実 在村松町)





◎ 何時もいつもの御高配にお礼申し上げます。それにしても中野氏の死去は残念だった。吉田氏の見舞いの記、故人の人柄をよく描写していて感銘深い。東京支部の益々のご健在を祈り、軍資金を少々振替で送った。

よろしく。

(中27回卒 五十嵐 喜作 在新潟市)

◎ この度の同窓会への突然のおじゃま、本当にすみませんでした。許斐さん達をロビーで待つはずが、お仲間入をさせていただき恐縮でございました。懐かしい方々にお会いでき、しかも同窓会なるものは初めての経験で嬉しさいっぱいでした。今、佐久間順子さんにお話したところです。ありがとうございました。

(高10回卒 相田 てい 在五泉馬下)

◎ 同窓会の大行事、ほんとに御苦労様でございました。支部会報ありがとうございました。早速に供えさせていただきました。長い間ご交誼を賜り、入院いたしましてからは度々お見舞い、お励ましをいただき、そしてとうとう親しくお見送りいただきしてしまいました。中野がどれほど嬉しくありがたく思っておりましたことか、お礼の申し上げようもございません。七月二日に五泉の両親のもとへ納骨いたし、白倉、山本、相田のお三人がお詣りしてくださいました。いろいろと本当にありがとうございました。(文中一部補正させていただきました)

(横浜市 中野 恭)

ちよつと良い話

10月10日 午前11時、「お早ようございます」と鶴巻氏の事務所へ入って行くと、もう佐伯会長はお見えで「ハイ、ご苦労さん」。「時間ピッタリだね」と鶴巻氏。やがて澤出さんが現われ、何やら取り出したのは美しい瓶に入ったお酒です。すると会長も笑いながら「ここにも一本あるよ」と、これまた「寒梅」！。おつまみ迄用意してあるのです。

でも我等は皆広報部員！ まずは仕事から！澤出さんの号令の下、テキパキと原稿の割り振りが進んでゆきます。今回は大橋貞チャンをはじめ、私以外は皆忙しい中ワープロを駆使して、原稿を作ってきていました。さあ困った。私もワープロを又引っ張りだしてきて使わなきやいけない様です。私はどうも性に合わない様で何年も棚の奥に仕舞いこんだままです。会報も今回で20号。仕事にも大分慣れてきて編集会議らしい雰囲気も出てきました。只、困ったことには皆老化現象が進んで眼が定かでなくなっており、秘かに苦労しているのです。それにしても皆なんと生き生きしていることでしょう。昼食も取らずに仕事をして3時半。さあ今日はここ迄終わりかな？と澤出さん。鶴巻氏の表情がニヤリとほころび、机の上にお酒が二本。皆フウッとリラックスして軽い打ち上げとなり、三面川の鮭を取材を兼ねて食べに行こうとか、新潟の県花はいつから“雪椿”になったの？ あ、それは鈴木タキさんが唄ってからだよ等ととんでもない冗談迄飛び出し、とうとうお酒二本は殆ど空となり、次回を約して食事の為、夕暮の湯島の町へ出て行きました。(深見)

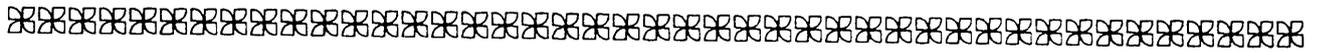
☆ ☆

事務局移転のお知らせ

☆ ☆

下記のとおり事務局の住所・電話番号・郵便振替番号が変更されました。

- 新潟県立村松高等学校同窓会東京支部
- 〒113 東京都文京区本郷3-39-12 (株)ツルマキ 内
- TEL 03-3818-6448 FAX 03-3818-6270
- 郵便振替 00160-9-26339



同期会

旧中27回同期会

日時 平成 7年10月 2日～ 3日
場所 高龍さまの長岡市 逢平温泉「和泉屋」
当番 五泉在住グループ

旧中27回生の平成7年度同期会はこうして始まった。卒業以来初参加の顔も含めて各地から集まったのは22人。すでに 1/3が鬼籍に入り、欠席事由の大半が体調不良という事実が、戦中・戦後半世紀余の経過を物語っているにもかかわらず、一堂に会した白髪、禿頭が一瞬にして臥龍ヶ丘の少年に若返るといふ事はどういうことなのか。毎度のことながらこの雰囲気を『いいなあ』とつくづく思う。

飲んで歌って、あまり長くはあるまい将来のことまで語り合っつての一夜を過ごし、翌日は酒蔵見学、錦鯉見物といまなお旺盛な知識欲を満たし、再会を期して解散し

たが、みんな帰宅しても暫らくは若い気分であったのではないかと推察する。

東京支部からの参加は 6人。常連だった中野のスマートな姿の見られなかったのは残念だったが、彼の霊もきっと『塵の巷を遠ざけて…』を合唱していたことだろう。

いまでも級長と呼ばれる二平幹事はじめ世話役各位のご尽力を謝し、あわせて次回幹事の村松組に『よろしく』と申し上げる次第。

(五十嵐 記)

佐伯殿 新潟・五十嵐

先日は相変わらぬお元気な様子に接することができ何よりだった。その一方で『ティシャバ』が通用しない世の中になったか、我々も長く生きてきたんだなと思った次第である。最近飲み過ぎているようだ。連日夜・昼飲み、これからも避けられない会がある。

いったん上がった看板は簡単におろせそうもない。意志薄弱なのか、意地きたないのか。そろそろ気をつけるべき年なのだが。平均余命まであと五年、それくらいは達者でいたいもの。奥方ともどもご自愛、ご健康を祈る。



古希のお遊び

高校第4回同期会 (昭和27年卒)

平成 7年 5月 27日、高校 4回卒の同期会を東山温泉で 35人出席し、午後 6時より開催した。宴会前に同窓会東京支部を説明して、6月の総会には大勢出席するよう

お願いしたので、大いに成果があり感謝しております。当日、有志 7人(2組)で会津河東カントリークラブに於いてゴルフを楽しんで来ました。(鈴木多喜男)



開幕前のおすまし顔



おとうさんは山へ穴掘りに…



六松会（高6回・同期会）

8月20日、高校六回卒業同期会（六松会）が新潟県月岡温泉「ホテル泉慶」で開催された。

昭和29年3月卒業生253名のうち、出席者は80名で還暦の祈禱参拝、記念写真撮影に続き、6時から懇親会が行われた。代表幹事挨拶のあと、不幸にして他界された友の冥福を祈り黙禱を捧げる。校歌斉唱、出席者代表挨拶、各地の近況報告に続き還暦を祝って乾杯。

41年の歳月を経て再会出来た歓びと、お互い健康を称え合い、夜更けまで酒と話題がつきなかつた。還暦祝い盛大な同期会であった。幹事の皆さん本当にありがとう。

東京支部常任幹事・沢出赳允（高6回）



芸者さんも還暦を祝って…

≡ ひとつの小さな文机から ≡

平成七年八月の村松、小学校からの友ユキちゃんから“偶には東の方へも足をのばしてよ”と誘われ、美しいお嬢さんの迎えを受けての訪問となり、そこで《おとめげい》と言う聞き馴れない言葉を耳にしました。《乙女芸》？ が実は《お留め芸》と言って、一子相伝、門外不出の技術を意味する言葉だったのです。

平成六年、村松郷土資料館で、村松藩成立三百五十年記念特別展が開かれた折り、江戸時代の物と思われるひとつの小さな文机が関心を集めました。外観は普通の文机なのですが、天板と脇板との組み方が一風変わっていて、楔形が組み合せて抜けない様になっているのですがどの様にして組み込んだのか解らなかつたそうです。

或る指物師が業界紙に紹介した際にも、組み込み方は解明されず、恐らく村松藩独特の古くからの技法で、藩独自の《お留め芸》の一種ではないか、と言う事になったそうです。この事が新潟日報に掲載され、興味を抱いたユキちゃんの御主人、伊藤正さんと加茂のたんす職人の栃沢さんが資料館を訪れ、つぶさにその文机を見た後、模型を作り乍ら組み方を解明致しました。凝り性の伊藤正さんに因ると、天板と脇板を四十五度の角度で、かつ一方からのみ組む事が可能であり、組み込みの作り出す模様は美しく、デザイン的にも優れているそうです。又栃沢さんに因れば、これは机、飾り棚の組み込みに使う特殊な技術《逆アリ型》と似ているが微妙に異なり、やはり珍しい組み方だそうです。

その後、曾て組んだ事がある、と、三人の御高齢の方

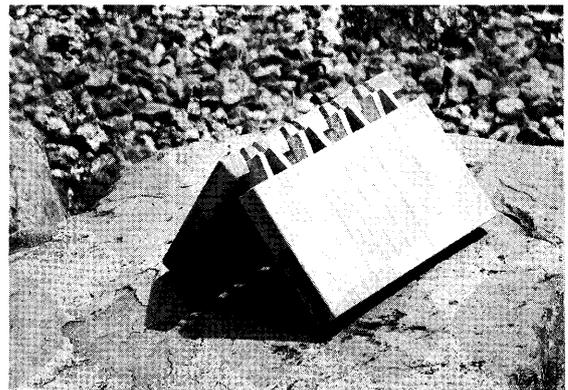
が名乗りを上げました。それぞれ《矢羽根ほぞ組み》、《水組み》、《逆ほぞ組み》と呼ばれ、どれも一子相伝とされ、技術的にも難しく、今ではもう殆ど組まれてはいないそうです。

九月初旬、資料館へ行き、伊藤、栃沢両氏の模型を見せて頂きました。其れは正確に直角に合わせないと決して組み込む事は出来ず、一旦組み込まれてしまうと、もうびくともしませんでした。

郷土資料館側では、曾て組んだ事がある、と言う三人の方々から伝授されたルーツが、東京、新発田、栃木と別々な場所である為、村松独自の《お留め芸》では？との期待は爽りませんでした。ひとつの小さな文机を巡って、ロマンを求める交流の輪が広がった事はとても有意義であった、との事です。

家の隅に追いやられている古い道具に、もう一度目をむけて見ると、隠れている何かが、見つかるかも知れません。其れは素敵な《宝物》かも知れません。（深見）

（村松郷土資料館及び新潟日報より）



お留め芸の模形

大空に散った同窓たち（第8回）（完）

—海軍航空機搭乗員となり戦没された
江花、笠原、豊島諸氏について—

斉藤 朝之（中28）

江花国吉氏、笠原正敏氏（中23）は甲飛1期会事務局の小池義男氏に、また豊島商吉氏（中24）は私と同期の安達小四郎君（新潟市在住）にそれぞれ照会したところ、三氏の戦没状況がわかりましたので、以下戦史などを参考に記してみます。

◎江花国吉氏（中23、両鹿瀬村出身）

戦死年月日 昭和19年10月15日
場所、状況 沖縄方面、哨戒飛行中戦死
機種 艦上攻撃機「天山」・操縦員



江花 国吉氏
（中学5年次）

◎笠原正敏氏（中23、十全村出身）

昭和22年 6月11日 復員（偵察員）
〃 22年10月28日 戦病死
（参考、甲飛1期会誌・甲飛の黎明から）



笠原 正敏氏
（中学5年次）

◎豊島商吉氏（中24、津川町出身）

戦死年月日 昭和17年10月25日
場所 ガダルカナル方面、戦死
機種 一式陸上攻撃機・偵察員
所属 木更津航空隊

1. 横須賀航空隊に入隊

(1) 江花氏、笠原氏は昭和12年9月1日、第1期甲種飛行予科練習生（甲飛1期生）として横須賀航空隊に入隊した。（250名入隊、182名戦没）

全国から2,874名の志願者のうち250名の合格者であった。横須賀空では、予科課程として諸教練、体育や航海・航空術等の軍事学、数学、理化学等の教養学科を受けた。

(2) 豊島氏は昭和13年4月1日、甲飛2期生としてよこすか空に入隊した。（250名入隊、187名戦没）甲飛1期生と同様に、約10倍の競争率であった。

2. 艦務実習

(1) 甲飛1期生は、昭和13年3月23日佐世保市へ陸行し、佐世保軍港から戦艦伊勢、日向、霧島、金剛に分乗して出港し、中国福州沖（艦載機の副州空爆）、台湾の基隆、台北を巡航した後、高知県の宿毛湾に入港した。実習を終わり戦艦陸奥、重巡洋艦鳥海に移乗し、同年5月21日横須賀軍港に帰港した。

(2) 甲飛2期生も同様に、上記の戦艦4隻に分乗し、同年9月から10月にかけて台湾方面を巡航して行われた。

3. 飛練教程及び実施部隊

(1) 甲飛1期生は、昭和13年10月31日予科課程を卒業し、

次の飛練教程へ進んだ。（248名）

江花氏は、飛行（操縦専修）練習生として霞ヶ浦航空隊に入隊し、筑波飛行場で三式初歩練習機、霞ヶ浦飛行場で九三式中間練習機の操縦訓練を受けた。さらに昭和14年6月から11月にかけて、館山空において七式艦上攻撃機（魚雷攻撃用）の操縦訓練を受けた後、実施部隊へ配属された。（操計113名）

笠原氏は、飛行（偵察専修）練習生として鈴鹿航空隊に入隊し、航法・通信・射撃等の偵察基礎教育を受け、昭和14年7月14日に卒業した。さらに館山空において偵察延長教育を受けた後、実施部隊へ配属された。（操計135名）

(2) 甲飛2期生の豊島氏は、昭和14年10月予科課程を霞ヶ浦空（同年3月横須賀空から転隊）において卒業し、飛行（操縦専修）練習生として、江花氏と同様に訓練を筑波空で、中練を霞ヶ浦空で操縦訓練を受けた。同年12月23日にこの飛練教程を卒業し、延長教育として館山空で艦上攻撃機の操縦訓練を受け、昭和15年1月に終了し実施部隊の木更津航空隊に配属された。

さらに木更津空において陸上攻撃機隊員に編入され、昭和17年「錬成隊」は台湾新竹基地に異動し、中隊指揮官として第11航空艦隊の第26航空艦隊に編成された。そして同年8月1日、木更津空（後に707空に改称）は、米軍のニューブリテン島ラバウル基地に進出した。

豊島氏の同年10月における戦死は、まさに甲飛1期生に負け得ぬ祖国への奉仕であった。

（参考）

甲飛1期生は、昭和16年12月のハワイ真珠湾攻撃に31名参加、同19年11月海軍少尉に任官したところまで、同期生はめっきり減って前線の航空部隊に配置になっていく者は数える程になっていた。マリアナ海戦で連戦を続けた艦種飛行隊の初級指揮官となって行動し、中隊を指揮に入ってから、相次ぐ航空作戦により12名（2期生）と多数の戦死者を出し、海軍中尉に進級して戦戦を交えた1期生は、わずかに66名になっていた。

（参考2）

新潟県内の各中学校（松中を除く）から甲飛1期生合格者は5名（新潟1、長岡1、高田2、小千谷1）であるが、全員戦没となっている。

本稿完結にあたって

支部会報「臥龍が丘は緑なり」平成4年新春号(No.12)に掲載以来、8回に及ぶ齊藤朝之氏(中28回卒)の“大空に散った同窓たち”は今回を以って終了いたしました。

長期にわたるご愛読、ならびに筆者の熱意、ご努力に深い敬意と感謝を表します。

とかく、日本悪者論が横行する昨今、忘れがちな当時の国をおもう青少年の至誠、純情には深い感動をおぼえます。涙と共に読んだとのお便りもたくさん頂いております。この記事は齊藤氏自身の体験された予科練、および同出身の同窓たちの動きに集約されていますが、その他、陸士、海兵、一級下級兵士として国に殉じられ、あるいは抑留などの経験もされた同窓も数多いことと思っておりますので感想など、又、是非知ってもらいたい事実などありましたら是非、支部までお寄せ下さるようお願いいたします。

尚、齊藤氏が奇跡的に持ち帰ることが出来た手帳を基にした300頁にわたる「零戦に乗って」の著書も刊行されております。(佐伯)

齊藤氏略歴

大正15年1月、新潟市で生まれる。

昭和6年4月、父、齊藤 勝先生(国漢)の県立村松中学校赴任により村松町へ移住。

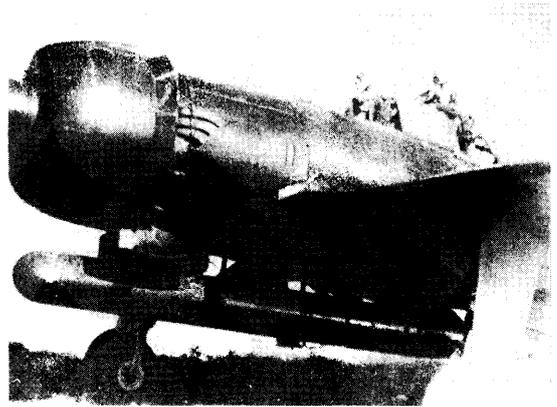
同17年3月、村松中学校繰上げ卒(28回)

同4月、土浦海軍航空隊へ甲種飛行予科練習生として入隊(10期生)以後、南方方面にて活躍。

20年7月25日、豊後水道上空哨戒中、潤滑油パイプの破損でエンジン停止、滑空にて大分基地(九州)へ不時着、九死に一生を得る。

20年8月、終戦、同18日帰宅(父、勝先生の転任先、千葉県市川市)

22年11月、東京電力(株)入社、定年後、電設サービス(株)を経て今日に至る。(栃木県藤岡市在住)



艦上攻撃機「天山」、魚雷を取り付けている

寄稿

生欲のお話

旧中27回 佐伯 益一

私は今年、古希の年を迎えた。年を越せば満七十一になるが、古希の祝いはまだしていない。まだそれ程の年とも感じていないし誰も私が古希を超えたとは思っていないようだ。若く見られて幸いである。思っているのは同級生と家族だけ。

私の父は七十三で亡くなった。そして理由はないがその年令を超えるまでは、生きていたいと思っている。そう思うとせめて七十七の喜寿まではと欲が出てきた。するともう少し足を伸ばして七十八の金婚式までと思うようになってきた。お祝いも盛大にやりたいな!と思う。そして翌日、コロリとってしまったら、どんなに幸せだろうと思ってみみる。いや待て、折角七十八まできたのだから八十の傘寿までの方が勘定が丁度よいと思ったりもする。八十八の米寿、九十の卒寿はチト無理かなと思いつつも、その時はボケているか、紙オムツをあてられているのかと思うとうんざりする。今でも半ボケ状態なのだから…。卒寿は寿を卒えることであるから鳩寿(きゅうじゆ)の方が良いと何かで読んだ。

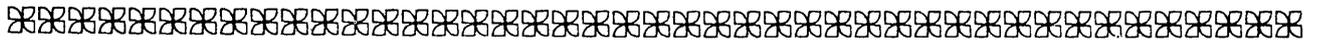
よくマスコミ紙に「老後のために」とか「老後の生きがい」とか書かれているのを見るが、一体老後って何だ?。老いた後は死ぬだけではないかと思った。ところが

気になって仕様がなかった。そこである時、真夜中にもかかわらず、昭和12年、中学入学時、金二円八十銭でも買い求めた(当時は新入生全員が購入義務)漢和大字典(“辞”ではない)をひいてみた。それによると「老とは人と毛とヒ(かむ)の合字で七十才以上の年寄りのこと。年寄りて腰曲がり、髪白くなり、全くその形を变うる義、故に老は年おいて毛のヒ(かむ)りし人という義なり。転じて老人の尊称、又、公家、家臣等の長の義とす」とある。なるほどと納得したが、情けないような、又嬉しいような説明でもあった。

これで老・壮・青の年令層が理解できた。壮年層の幅が広いので今はやりの熟・シルバーが入ったのかもしれない。

新年早々、死とは縁起でもないといわれるかも知れないが、思うままに書いた。これからの人生、思いきり楽しんで過ごしたいものと思う。これは生きていたい意欲、即ち生欲である。性欲ではない。

東京支部会報も本号で20号。創刊以来1回も欠かさずよく此処まで来た。ようやく成人式を迎える。願わくば白寿までと思う。九十九は永遠にという意味である。



中村 倉吉事務局長（旧中22回卒） 逝く

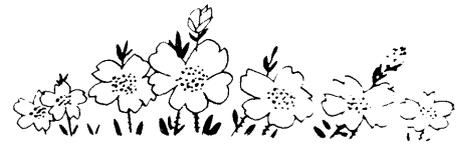
本年5月中旬頃から「どうも背中がかゆい」と洩らしていた松高同窓会東京支部事務局長の中村倉吉氏が港区白金の北里研究所病院に検査入院されたのが5月の下旬、一時退院後、再入院されたのが6月26日でした。

その後、黄疸症状が続き、ご家族様の再起の願いも空しく8月14日午前7時31分、ついに不帰の客となりました。

告別式は同18日午前10時より社葬により陽寿院で執り行なわれ、支部からは通夜、告別式とも佐伯支部長ほか21名が出席、ご焼香いたしました。尚、支部からは献花、御香典の他 佐伯支部長が弔辞を捧げました。ここに生前中村事務局長のご業績を偲びながら 謹んで哀悼の意を表しご冥福をお祈りいたします。

6月1日の支部大会に一時病院を抜け出して出席されたのが会員にお会いした最後となりました。

（「清風院倉雲浄光居士」 行年 76 肝不全）



弔 辞

謹んで、同窓会中村倉吉先輩の御霊に申しあげます。

今月十四日早朝、あまりにも突然な先輩急逝の報に接しまして、未だ茫然たる境地より脱し得ません。

七月末、再度のお見舞いに参りました折、八月末頃に退院出来るだろうと元気にお話を交わしましたが、まさかこうゆう形でご退院とは夢にも思いませんでした。

残された御家族様のご心中に思いをいたし 謹んでお悔やみ申し上げます。

顧みますれば 中村先輩と私との出会いは二十数年前やはり同窓会の席でした。先輩のお母上様が東蒲の津川の出身であられる事もあり、特に気持が合い、以後先輩後輩の別なく、他の人達よりも更なる御交誼を頂きました。そして後年、私が同窓会で支部長の推薦を受けました際 是非私を助けていただきたいと先輩にもかかわらず無理に事務局長就任をお願い致しました。又、事務局事務所も提供していただきました。以来 数多くの御指導、適切なアドバイスを賜り今日まで大過なくすごすことが出来ました。

村松高校東京同窓会が今日、新潟県に於いて一、二を争う同窓会に、否、全国でも有数な同窓会に発展することが出来たのも、これ総て中村先輩の御協力と先輩

を慕う会員各位の御努力の結果と厚く感謝して、を記であります。

先輩は二十才台の青年時代をほとんど軍隊で過ごされました。昭和十五年、新発田の聯隊に入隊され、以後幹部候補生に合格、中国大陸に在ること七年間、戦後陸軍大尉として復員されるまで、この間一度も部下を殺した事が無いとのこと、中国政府よりいわれたる理由により戦犯の指名を受けながらも、一中国人の証言により、それが全くの無実であり、逆に感誂される立場であったなどのお話も承りました。中村先輩に連情あるお人柄が偲ばれる所以でもあります。

先輩はよく、時々頭が痛くなる、耳鳴り、と申されておりましたが、それは戦闘中による負傷で砲弾の破片が頭の中に残っており、手術的にも取り除く事が困難であった由、最近ご子息様からお話を聞くまでは全く判りませんでした。今ようやくその痛みから開放され、気の晴れるお思いであろう事は容易に想像出来ております。

然し、これも悲しい想いでもあります。

長いおつき合いの間、色々なお話を伺いました。学校時代、柔道の寒稽古で五泉から村松の学校まで朝早くから吹雪と闘いながら一里余りの道を一日も欠かさず歩いて通った話など、つい昨日の如く脳裡に浮んで参ります。

中村先輩は常に言っておられました。

「学校や軍隊で学んだ教育体験が今日の人間形成に連が



っている。転んだり起きたり、負けずに進んでゆこう。躰は老いても心はいつも青春、夢と希望をもって進んでゆこう。旧人類も新人類も協力して、親睦の輪を拡げてゆこう。人生は一本勝負だ。」と。 此処に私は大正生まれの気骨を感じ取ります。そして私は、この言葉を同窓会員に対する励ましとして広く各位にお伝えしたいと存じております。

又、中村先輩が躰一つで事業を興される時、ご親戚である陽寿院様から一字を頂き、会社名を株式会社“寿”とされたのも深く理解できる処であり先輩のお心の深さがうかがわれます。来春、会社の創立何十周年かのお祝いを迎えるに当たり、その式典を楽しみに私に語りかけ

たその時の笑顔、今でも忘れることができません。さぞや残念だったろうと涙を禁じ得ません。お疲れでもあったと存じます。幽明境を異とする今日、天界においては為すべきお勤めがなかなか多く、忙しいものと聞いております。今は暫らく、ゆっくりお休み下さい。

行年七十六才、逝くにはまだ早すぎました。尽きせぬ想いはありますが、心から先輩の御冥福をお祈り申し上げ、以って弔辞といたします。

平成七年八月十八日

新潟県立村松高等学校同窓会

佐伯 益一 合掌

旧友、中村 倉吉君

亀嶋 謙

大正13年、五泉小学校へ入学以来、旧制村松中学も併せて11年間、君と私は良き遊び仲間であった。当時の中学は地方ではエリート的な存在であったので、いろんな面で鍛えられる事が多くあったが、些細な事にも感激に浸り、少年の夢を充分に貪って過ごすことが出来た。今、若さに燃えた青春の時代を懐かしく思い出す。

然しこの良き時代が終わり頃になると、あの大戦が始まり、多くの学友が戦死や戦病死で亡くなった。戦前は結核のため亡くなった人も多く、現在生き残っている人は3割弱にしか過ぎない。戦争のあった4、5年間を除けば君とは常に身近に交友を続けてきた仲間であった。奇しき縁ではないかと思う。

つぎに二人の間には似たような環境の変化があった。少年時、考えていた人生行路を180度転換した人生を歩むことになったのである。君は中学を卒えると長男なるが故に家業の呉服店を継ぐべき人生を考えていたようである。私は親の希望で普通の医師、まあ内科医を一応の目標にしていた。君の転機はおそらく軍隊に入り甲種幹部候補生に合格したことが基因ではないかと思う。私も又、徴兵猶予のため単に学籍を置いただけの早稲田にそのまま留ってしまったことにあった。人生は全く先の事は分からないものだ。

終戦後、間もない頃、君と偶然、東京の日本橋で会った。君の方が先に私に気がついたらしい。やあー亀嶋君ではないかと、驚きとも喜びともつかぬ大声をあげて手を握り合った。君は軍隊内では高位の将校であったが、

全く昔の俣の童顔で、人懐っこい気質も同じであった。あれからでも、もう40年はとっくに過ぎている。

君は人生50を間近にし発起一念の上、新しくクリーニング業を始めた。誰にでも簡単には出来ないことだ。勇気がいる。君は元来、楽天的な性格であった。また商売気も多分に持っていた。そして人一倍、努力家であった。実際の経過についてはよく分からぬが、凡そ10年位の間ですっかり事業の基礎を築き、業績を確実に拡げていった。むべなるかなと思う。私もまた第二、第三の人生を歩んでいた。お互い還暦を少し越したある日、ゆっくり夕食を共にしながら語ったことがあった。懐旧談で始まったが、いつの間にか、人生論になった。君は目を輝かし自信をもって言った。「人生は、結局“運”の一語に尽きる。もっと突っ込めば、その人の前世からの定まった運命かもしれない。とにかく個人ではどうしようもない。問題は人生途上の大事な時に、どういう人に出会うかによって決まる。それが即ち“運”だ。しかもその“運”も一瞬にして決まる。幸運になるか悪運になるかは、その時は分からない。ずっと後になって初めて分かる」と。私は終始、押され気味であった。特に「運命は一瞬にして決まる」と言った言葉が印象的であった。

君の考えはおそらく60有余年の尊い体験、生死を常に身近にしての軍隊生活、戦後、今日までの苦汁、すべてが実際に裏付けされた自信のある人生行路から迸り出ている言葉であった。私は、只又脱帽した。そしてこれまでも増して君が好きになった。年月はどんどん過ぎて



ゆき、やがてお互いに70才の古希を無事越えた。「赤山会」の例会があった後の、ひと休みの時であったと思う。君は不意に「亀嶋君、到頭二人とも七十を超えたね、今度はいよいよ神仏論になるね、どうかね亀嶋君、一体、世に神や仏は本当に在るものかどうか」と呟くように言った。私は言った。「それは無論判らない、しかし人間社会には神や仏が在るとした方が、すべてうまく歯車が合うのではないかと、君はその時、ホッというような顔をして私を見つめていたが、直ぐ相好をくずして頬を少し染めながら「そうかも知れない」と言った。いい一瞬であったが後は続かなかった。何時かまた話し合う機会があると思っていたが、その君と、ついに別れるときが来てしまった。

私とても先行きそんなに長い人生とは思っていない。しかし生きていく限り、君のあの昔ながらの童顔、人

懐っこい人柄、少々だが侠気のあった気性、そして子供の時から直そうともしなかった五泉言葉の方言、すべて懐かしい。今は謹んで冥福を祈るのみである。合掌。
(平成7年8月19日記)

新事務局人事のお知らせ

前事務局長の中村倉吉氏ご逝去に伴う事務局の人事について、去る 9月 9日に開催された幹事会に於いて審議され、全会一致で下記の通り決定致しました。

記

事務局長 鶴 卷 浩 (高10回) 前事務局次長
事務局次長 大 橋 貞夫 (高10回)

編集後記

新年おめでとうございます。

会報も昭和62年 6月27日・創刊以来20号となりました。

この間、元号は昭和から平成に変わり、社会の変化も急速に進みパソコンに頼る時代になりました。

会員の皆様はじめ同窓会、学校関係の方々から寄稿やお便りをたくさん、お寄せいただきまして誠に有難うございました。

20号の編集会議は9月から開始し、30度を越す暑さにも負けず休日返上、皆様からの原稿や写真を整理、校正と順序をおって、出来上がるまで四ヶ月を要しました。

昨年は、1月17日・兵庫県南部大地震では、戦後経験最悪の大災害となりました。3月20日、東京地下鉄サリ

ン事件では、通勤時間を狙われ大惨事となりました。

4月の統一地方選挙では東京都知事・青島幸男氏、大阪府知事・横山ノック氏が誕生し、世の中の新しい流れが期待されました。夏の暑さも二年続けての猛暑となり10月末まで、クーラーの世話になりました。

会報21号の編集会議も近く開催します。皆様からお便り、ご寄稿、その他「何でも」結構ですから、事務局までお寄せ頂きたくお願いいたします。

皆様のご健康とご多幸をお祈り申し上げます。
終わりに、編集会議の場所と、OA機器を貸していただいた鶴巻 浩氏 (高10回卒) に感謝し、御礼申し上げます。

(広報部)

平成8年 1月 第20号

発行人：新潟県立村松高等学校同窓会東京支部 広報部

事務局：〒113 東京都文京区本郷 3-39-12 (株) ツルマキ 内

TEL 03-3818-6448 FAX 03-3818-6270

郵便振替 00160-9-26339